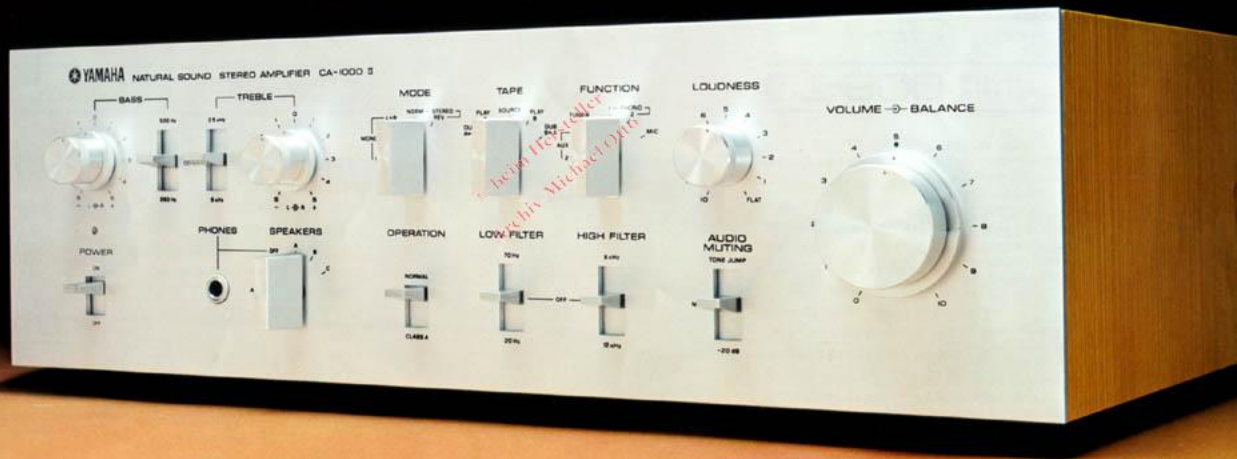


Stereo Amplifier & Tuner

アンプ・チューナ



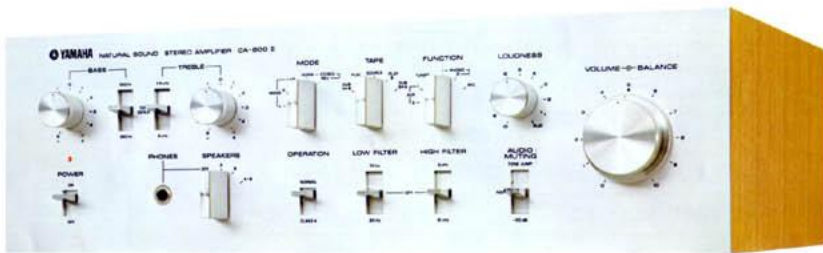
YAMAHA

CA-800II ●ステレオプリメインアンプ
●¥95,000

B級→A級動作切換えのパワーアンプ部も、全段直結ビュアコンOCL回路の構成も、ブートストラップ回路を削除し位相の乱れをなくし秀れた過渡特性と抜群の分解能を達成していることも、そして測定器に接する低歪率もCA-1000IIと同じです。ただパワーだけがB級動作で55W+55W、A級で10W+10Wと小さくなっています。つまり質的には同質で、量的に幾分小さくなっています。能率の悪いスピーカや特に広い部屋で大音量で鳴らしたい場合はCA-1000II、普通の能率のスピーカで普通の部屋で鳴らす場合は余裕を残してCA-800IIです。そして4段直結のイコライザも、許容入力310mV、RIAA偏差±0.2dB、CA-1000IIと同様です。

CA-800IIの特長

実効出力(1kHz・両CH)B級……55W+55W
A級……10W+10W
ダイナミックパワー(10Hz-F・B級)……160W
全高調波歪率(20Hz~20kHz・1W)B級……0.04%
A級……0.02%
パワーバンド幅(HF・B級)……5Hz~70kHz
ダンピングファクター(1kHz・8Ω)……70以上
PHONO回路……2系統3mV
PHONO最大許容入力(1kHz)……310mVrms
RIAA偏差……±0.2dB
トーンコントロールBASS……50Hz±15dB
トーンコントロールTREBLE……10kHz±10dB
フィルターLOW……20Hz, 70Hz(12dB/oct)
フィルターHIGH……8kHz, 12kHz(6dB/oct)
ラウドネス……コンチニューアスクラウドネス
消費電力……140W
寸法(W×H×D)……436×144×323mm
重量……11.0kg
●価格及び外観は改良のため変更する場合があります

CA-600 ●ステレオプリメインアンプ
●¥75,000

CA-600のメインアンプ部は高級回路の代表でも全段直結ビュアコンプリメンタリOCL回路で5Hz~70kHzと高級機レベルのパワーバンド幅を実現し、0.1%まで35W+35Wのパワーを得ています。イコライザ回路は4段直結回路の豪華なもので、イコライザ素子にも高精度のC種を採用しRIAA偏差も±0.2dB以内と精密で、許容入力310mVrmsと十分な値です。SN比もコンピュータを駆使してCAD手法で解析された基本回路の高度さと配線パターンに於いて基板と端子の直結化などによって高SN比低雑音です。さらに、ユニークなヤマハオリジナルのコンチニューアスクラウドネスによってリスニング環境に応じた聴感矯正が可能です。

CA-600の特長

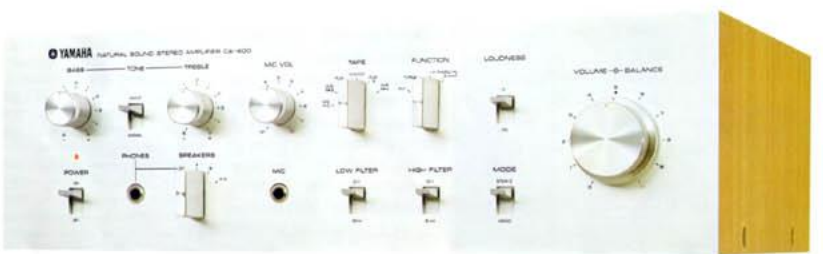
実効出力(1kHz・両CH)B級……35W+35W
A級……45W+45W
ダイナミックパワー(HF)B級……100W
A級……140W
全高調波歪率(20Hz~20kHz・1W)……0.04%
パワーバンド幅(HF)……5Hz~70kHz
ダンピングファクター(1kHz・8Ω)……70以上
PHONO回路……2系統3mV
PHONO最大許容入力(1kHz)……310mVrms
RIAA偏差……±0.2dB
トーンコントロールBASS……50Hz±10dB
トーンコントロールTREBLE……10kHz±10dB
フィルターLOW……50Hz(12dB/oct)
フィルターHIGH……8kHz(6dB/oct)
ラウドネス……コンチニューアスクラウドネス
消費電力……120W
寸法(W×H×D)……436×144×323mm
重量……11.0kg

CA-400 ●ステレオプリメインアンプ
●¥55,000

CA-1000II以後のCAシリーズの中で一番若い型番をもち一番最後に発表された機種であるCA-400は、ある意味では、CA-1000II以降の製品が蓄積した技術力を最も円熟させ自由に駆使した最も進んだ回路構成です。例えばメインアンプは、位相の乱れの原因となるブートストラップ回路を省略するためのゲインが大きすぎるのではない測定器回路の採用などにより、歪率は測定限界に達するほど小さく、しかもその歪波形や歪成分まで念頭にチェックされています。そして、サインウェーブにパルス合成した動特性チェックにおいても入力波形と出力波形がぴったりと重なってしまうほどの正確さです。ビュアなヤマハの音の裏付けて

CA-400の特長

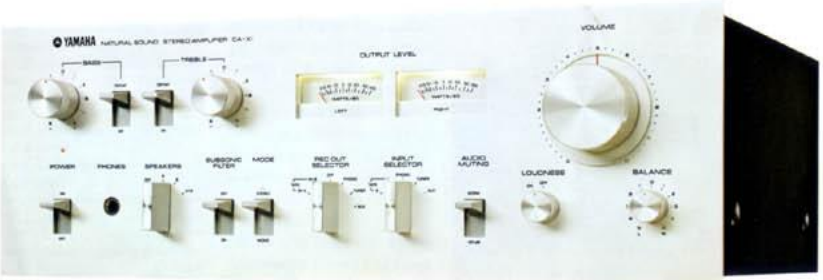
実効出力(1kHz・両CH)B級……22W+22W
A級……28W+28W
ダイナミックパワー(HF)B級……70W
A級……50W
全高調波歪率(20Hz~20kHz・1W)……0.04%
パワーバンド幅(HF)……5Hz~70kHz
ダンピングファクター(1kHz・8Ω)……50以上
PHONO回路……2系統3mV
PHONO最大許容入力(1kHz)……135mVrms
RIAA偏差……±0.5dB
トーンコントロールBASS……50Hz±12dB
トーンコントロールTREBLE……10kHz±10dB
フィルターLOW……50Hz(12dB/oct)
フィルターHIGH……8kHz(6dB/oct)
ラウドネス……スイッチ式
消費電力……70W
寸法(W×H×D)……436×144×300mm
重量……8.0kg
●価格及び外観は改良のため変更する場合があります

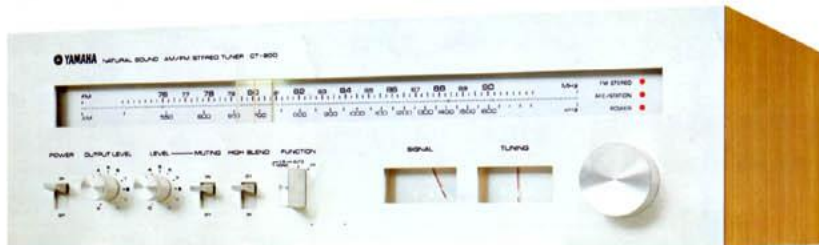
CA-X1 ●ステレオプリメインアンプ
●¥49,500

CA-X1は、「ステージサウンドのリアリティをライブにホットに表現するストロングクリアな音」をテーマに開発されました。徹底したクオリティ追求機であるCA-X1は、カレントミタ回路をコンプレートした差動入力4段直結イコライザ、同じくカレントミタ回路を配置した入力差動全段直結ビュアコンOCL回路のパワーアンプ、その回路構成は典型的なヤマハ風で、全(費)用で徹密に仕上げられています。歪率の絶対値を一桁下げることをテーマに新しい測定器を導入し、今までより一桁低い歪率を実現しました。そしてCA-X1は、0.01W~100Wまで直読できるメータや、レコードを聴きながらFMが録れるREC OUTセレクト装置。

CA-X1の特長

実効出力(1kHz・両CH)B級……45W+45W
A級……42W+42W
ダイナミックパワー(HF)B級……125W
A級……190W
全高調波歪率(20Hz~20kHz・20W)……0.01%
(1kHz・20W)……0.005%
パワーバンド幅(HF)……10Hz~50kHz
ダンピングファクター(1kHz・8Ω)……50以上
PHONO入力感度……2.5mV
PHONO最大許容入力(1kHz)……150mVrms
RIAA偏差……±0.3dB
トーンコントロールBASS……50Hz±12dB
トーンコントロールTREBLE……10kHz±10dB
フィルターLOW……25Hz(12dB/oct)
ラウドネス……スイッチ式
消費電力……165W
寸法(W×H×D)……435×160×345mm
重量……8.7kg
●価格及び外観は改良のため変更する場合があります





CT-800 ●ステレオチューナ

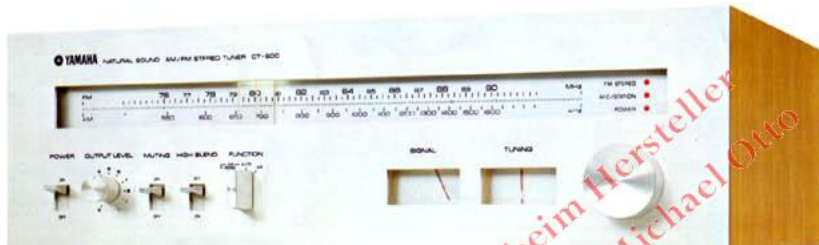
●¥75,000

CT-800は、チューナの重宝やSN比など直接的に音質を支配するオーディオ特性の決め手となるIF段とMPX段をCT-7000の開発で得られた成果である微分利得直視法とNFBスイッチング方式で十分にハイファイリティに仕上げられています。微分利得直視法はIF段のフィルタやディスタリムホータを通常の特性カーブよりも一歩突っ込んでその伝送特性まで解析できる方法で、微分利得偏差を最小に抑えることによりそこを通過する信号の位相特性をリニアにすることが出来ます。MPX回路にはヤマハ独自のNFBスイッチング方式を採用し歪率はモノラル時0.15%、ステレオ時0.3%以下と大変な低歪率で、ステレオセレーション45dB以上。

CT-800の仕様

FM受信感度(100kHz)	17.0V
イメージ妨害比(84MHz)	100dB
IF妨害比(84MHz)	100dB
スプリアス妨害比(84MHz)	100dB
キャプチャレシオ	1.0dB
実効帯域幅(BW)	80kHz
SN比 MONO	75dB
STEREO	72dB
全高調波歪率(400Hz) MONO	0.15%
STEREO	0.3%
ステレオセレーション(400Hz)	45dB
周波数特性	20Hz-15kHz ±1.5dB
サブキャリア抑圧比	60dB
AM受信感度(HF/バーアンテナ)	52dB/m
AM周波数(1000kHz)	30dB
消費電力	12W
寸法(W×H×D)	436×144×323mm
重量	7.3kg

●規格及び外観は改良のため変更する場合があります



CT-600 ●ステレオチューナ

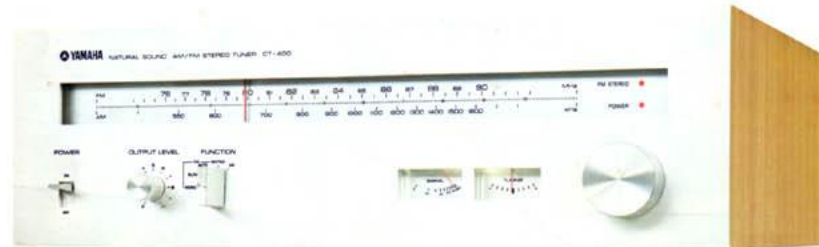
●¥60,000

CT-600は、ヤマハチューナの一貫した大きなテーマである入力依存性を小さくすることを追求しています。つまり、アンテナ入力レベルの大小によって受信状態が少しも変化しないようにしようという実用に即した技術です。具体的には、フロントエンドとIF段の設計にあたって位相特性や増入力特性を重視し、密着電界から120dBの低電界まで安定した受信を可能にしています。そしてさらにヤマハオリジナルのAFC/STATIONインジケータ—オートタッチチューニング機構を装備しています。これは選局時にチューニングダイヤルに手を触れると自動的にAFGがOFFになり、局と同調するとSTATIONインジケータが点灯する機構です。

CT-600の仕様

FM受信感度(100kHz)	20.0V
イメージ妨害比(84MHz)	90dB
IF妨害比(84MHz)	95dB
スプリアス妨害比(84MHz)	95dB
キャプチャレシオ	1.5dB
実効帯域幅(BW)	75dB
SN比 MONO	70dB
STEREO	66dB
全高調波歪率(400Hz) MONO	0.3%
STEREO	0.5%
ステレオセレーション(400Hz)	40dB
周波数特性	20Hz-15kHz ±1.5dB
サブキャリア抑圧比	40dB
AM受信感度(HF/バーアンテナ)	52dB/m
AM周波数(1000kHz)	30dB
消費電力	10W
寸法(W×H×D)	436×144×323mm
重量	7.0kg

●規格及び外観は改良のため変更する場合があります



CT-400 ●ステレオチューナ

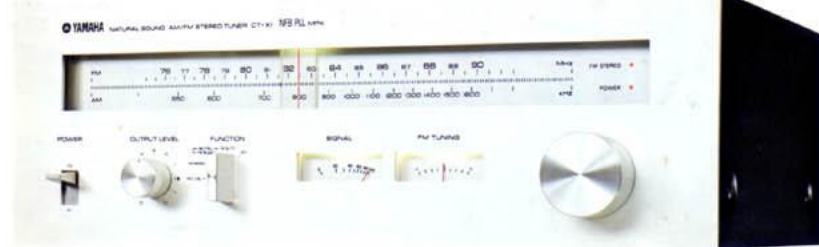
●¥40,000

CT-400は、シンプルイズベストという明快にして鋭利な回路構成で、その音は見事に明快で純粋なものFMサウンドです。フロントエンドには低雑音のジャンクションFETを使用しイメージ妨害比、スプリアス妨害比の向上を計りつつ20dBという実用感度を確保しています。IF段は、定電流バイパス回路からなる高利得のIC差動アンプと6素子セラミックフィルタを配し、ヤマハ独自の微分利得直視法でその位相特性をチェックするなどして実効帯域幅75dB、キャプチャレシオ1.5dBと秀れた値を得ています。MPX回路は高安定ICによる2重平衡差動復調回路でステレオ時で0.5%以下と低歪率、「気品あふれるFMの音」です。

CT-400の仕様

FM受信感度(100kHz)	20.0V
イメージ妨害比(84MHz)	55dB
IF妨害比(84MHz)	75dB
スプリアス妨害比(84MHz)	75dB
キャプチャレシオ	1.5dB
実効帯域幅(BW)	75dB
SN比 MONO	70dB
STEREO	66dB
全高調波歪率(400Hz) MONO	0.3%
STEREO	0.5%
ステレオセレーション(400Hz)	40dB
周波数特性	20Hz-14kHz ±1.5dB
サブキャリア抑圧比	40dB
AM受信感度(HF/バーアンテナ)	52dB/m
AM周波数(1000kHz)	25dB
消費電力	2.6W
寸法(W×H×D)	436×144×300mm
重量	5.0kg

●規格及び外観は改良のため変更する場合があります



CT-X1 ●ステレオチューナ

●¥35,000

CT-X1は、CA-X1と同様、再生音楽の「音」からの発想でなく、生の音楽の「音」からの発想によって音造りされています。あらためてシビアにFM放送を聴き直そうという徹底したクオリティ追求機です。ジャンクションFETと3連バリコンによる高性能フロントエンド、6素子セラミックフィルタ6段定電流バイパス差動リミッタのIF段、そして初めてのNFBをかけたPLL方式OMPX回路によって実効帯域幅75dB、キャプチャレシオ1.0dB、ステレオ時歪率0.25%、セレーション40dBという大変な高性能を表現しています。そしてCT-X1は、妨害検知型シグナルメータやエアチェックに便利な333Hz REC キャリブレーション

CT-X1の仕様

FM受信感度(100kHz)	18.0V
イメージ妨害比(84MHz)	55dB
IF妨害比(84MHz)	75dB
スプリアス妨害比(84MHz)	75dB
キャプチャレシオ	1.0dB
実効帯域幅(BW)	75dB
SN比 MONO	77dB
STEREO	71dB
全高調波歪率(400Hz) MONO	0.25%
STEREO	0.25%
ステレオセレーション(400Hz)	40dB
周波数特性	20Hz-15kHz ±1.5dB
サブキャリア抑圧比	40dB
AM受信感度(HF/バーアンテナ)	52dB/m
AM周波数(1000kHz)	25dB
消費電力	7W
寸法(W×H×D)	435×160×349mm
重量	6.9kg

●規格及び外観は改良のため変更する場合があります